守り続ける農業
―能登を支えるエコ栽培―

岡野　秀彰

聞き手・今川 孝星　川田 孝紀（石川県立志賀高等学校２年）

自己紹介

私の名前は岡野秀彰です。昭和 24 年３月 10 日生まれの 68 歳。兄弟は男１人おります。今は家には妻と母と私の３人がいます。子供は長男と娘２人の３人です。長男は子供が３人、真ん中は子どもが２人、一番下は子どもが３人おりますので、孫が８人おることになります。家には誰もおらんけどね。家は農家で子どもの頃からずっとその手伝いをしとった。地元に帰った理由は、私の母が病気やったってこと。父が「田んぼしに帰って来いま。」言うて、地元に帰ってきました。大学のときは料理人になろうと思っとったけど、志賀町の農協に就職しました。そして平成 14 年に直海（のうみ）・釈迦（しゃか）堂営農組合を設立しました。

能登の農業

昔は小っちゃい田んぼばっかりでした。農家は田んぼ水稲がメイン。機械もないし、牛を使って畑も耕しとりました。原理は今のトラクターと一緒やね。私の子どもの頃は、その牛にえさをやる仕事があったよ。わらとフスマとコンカと麦を混ぜてやりました。今の農業はすごいね。トラクターは１台 1200 万円もするからね。

この地区の生産量には土質が関係しています。いい場所と悪い場所があるらしいね。赤土系統がいいらしい。志加浦や上熊野は米が美味しいと昔から言われとる。土によって肥料のやり方も違うよ。

また、能登は大きな川がないから昔からのため池がいっぱいある。新しく作ったため池はないけどね。うまいこと作ってあるよ。今はポンプで水を回してるから昔ほど水の量はなくてもいいんです。だから、ため池は少なくなってきとる。使わなくていいもんで、そしたら管理しなくなって、だめなため池が増えてきたよ、残念ながら。

昭和 30 年代に土地改良して、米がよくとれるということになって、そこで、米が生産過剰っていうてね。志賀町では、大きな米の不作がないんですよ。災害は全くなしです。日本

田んぼ近くの川

人が米をあまり食べなくなったこともあって、減反政策が昭和 46 年から始まるわけやね。だから田んぼの 3 割は、ここで水稲を作ったらだめですよってなった。要するに強制的に、水稲に代わるものを作ってくださいって。これが来年からはなくなるんですよ。自由に作っていいよってなります。自由に作ってもいいて言われても作らんと思うね。生産過剰になって価格が安くなると思うから。だから私のところも作りません。全体のことを考えてやらないとね。生産者自らが考えてそれを守っていくべきやと思う。自分の事は自分でしていかないと。「作れるから作ったれ」「俺だけでもいいから作ったれ」ていう気持ちになったら日本中無茶苦茶になっとるね。

直海・釈迦堂営農組合

営農組合は、平成 14 年に設立しました。認定農家の集まりで営農組合という。最初は、5、6 人で 50 町歩（ちょうぶ）の田んぼを作ろうという話やった。1 枚 1 町歩の田んぼが 25%はあります。そうじゃないと国の補助金が出ないんです。

さっきも話したけど、この辺は小さい田んぼばっかりで、水の便も悪かった。それから勤め人が多なって、田んぼをするのが嫌になって、あんまり田んぼも作らんようになっていった。農業者の高齢化が進んで離農者が増えてきたしね。ここには基本的に 64 の農家がおったけど、今は、もう 10 人ぐらいしかおらんやろね。その人たちも次の跡取りいないから、次はこの営農組合が引き受けなきゃ、どうにもならんと思う。耕作放棄地がいっぱい出てきたので、大きい田んぼを作ろうということで平成11年から土地改良が始まったよ。ちっちゃい田んぼから 10 倍もあるような大きな田んぼを作るとなると誰が作るのかって話になって。それで、みんなの土地を共同でやりましょうということで、営農組合を設立しました。

でも、このとき、皆の意見をまとめることが苦労やったね。若い人がいないから、田んぼを作っていく者がいなくなるっていうのは、わかっとる。私ら元気やさかい、「作られるまで作る」という考えの人が多かった。でも、その後どうするっていう話から始めて、今、思い切って皆と一緒にしましょうっていう話にまとまった。5 年も 6 年もかかったけどね。元気だからって、そんなことしとるとだめなんで、慌てて組合を立ち上げた。まずは作っておかないと。

組合は、本来は、釈迦堂地区は釈迦堂地区だけ、在所ごとでやる。ちょうど、あそこの山と山に囲まれとる間に田んぼがあるところの地区ね。釈迦堂地区、直海地区と松ノ木地区外回りに家があるやろ。その真ん中に田んぼがあるんや。直海の在所の人と釈迦堂の在所の人と松ノ木の在所の人と一緒にやろうとなったわけ。三つの地区で一緒にやるという例は少ないらしい。でも、農家も少なくなって、私たちのような認定農業者がこれから田んぼを作っていくようになるんじゃないかなと思う。

仕事は今、楽しいよ。一つの目標に向かって努力しとるから。その後がどうなるかね。

この直海・釈迦堂営農組合はみんなの集まり場所になっとる。暑いときは朝 5 時から仕事しとるよ。社員は 6 人。兼業している人もおって作業が多いときにみんなに集まってもらっとる。全部集まったら 20 数人おりますわ。私が 2 番目に年寄りや。若い人はあんまりおらん。一番若い人は 35 歳ほどや。女の人は全然おらん。だから女の人も入ってもらえるようにと思っとる。今は花。フリージア、ハボタンなどをつくっております。昨年度の志賀高校の卒業生には、うちで作ったフリージアの花束を贈っていますよ。

この直海・釈迦堂営農組合を作って、やっぱりよかったと思う。皆、「田んぼするの嫌」って弱っとるからね。農業の機械は高いやろ？　営農組合で機械を買ったから、「機械を貸してね」っていう人には貸してあげとる。田んぼ耕して、

植えて、稲刈ってね、全部手伝いしに行っとるよ。個人で機械買うのは、維持費もあって大変です。小さいコンバイン買っても 300 万円します。田植え機は 150 万円くらいかな。借りるのは、必要なその時期だけやから。そのメリットは大きいと思うよ。苦労して組合を立ち上げたかいがあったわ。

エコ栽培で能登里山を守る

石川県から審査を受けて自然環境にいいお米を作っているという認定を受けています。エコ栽培は、基本的には化学肥料を少なくしていく栽培方法です。肥料も高額なんです。少しでも量を減らす努力をしていかないと。今までわらを燃やしていたのを、そのまま土に返すとか、その分だけ化学肥料をいれなくていいわけです。

それと畜産農家の方々と協力しあっています。糞尿の処理に困っとるらしいね。最近の農業は化学肥料や農薬が中心になっとるので、エコとか自然米とか自然野菜が人気出てきとるらしい。ウチは役場さんが指導してくれとります。志賀町が農家に「こんなことやってみましょうよ。」と声をかけたんです。この事業には、国が県や町を支援しとるみたい。いろんな補助金が出ていますよ。

「蛍の里釈迦堂米」という名の米がエコ米です。他の米と違うとこっていっても、まあほとんど同じ。でも化学肥料をあまり使わない。そして農薬も極力抑えている。農薬は米には悪くはないけど、蛍とか虫とかには悪い。虫を殺すのがほとんどだから。エコ栽培で農薬を少なく抑えたことによって蛍が増えてきた。蛍キレイやろ？　この辺も土地改良して増えてきた。蛍以外の虫も増えとると思うよ。やっぱり、農薬を抑えたことと、下水道が整備され水がきれいになったからやね。

エコ栽培での失敗はあんまりなかった。でもエコ栽培のお米は販売していません。販売しようと思ったけど、やっぱり生産量が少ないって言われた。量が少ないのは土質の関係です。いい場所と悪い場所があるらしくて、いい米の量が少ないらしいよ。ここは 20 町歩ぐらいしかないしね。下手に販売して、美味しいお米やと売り出したら絶対失敗する。信用落とすより販売しないほうがいいていう結論です。

農家としての１年は大変です。私の場合はね、基本的には４月の初めに田植えするための苗をハウスに入れる。５月には田んぼに植える。植えれば今度は８月の終わりから９月に稲刈りする。そして脱穀して商品として出す。農家でいちばん大変なのは、天気やなあ。いい天気が３日続いてから田んぼ入らなだめなんや。そうしんと腐ったりして芽が出ないんや。ソバでも麦でも同じや。雨が降った後田んぼ耕したら絶

収穫の様子

ハボタン

ソバの畑

対だめや。よく乾いてからおこして、またよく乾いてから種をまかんとだめなんやわ。

あと私自身が志賀ロータリークラブに入っています。入ってよかったことは、農業の経験を生かした活動ができることです。私のハウスでサツマイモの収穫体験を小学生などに案内を出します。５月中旬にサツマイモを植えて９月に収穫祭をする。その間に草取りしなきゃいけないだろ。草取ったあと、おにぎり食べて 20 時になると蛍を見て解散してね。そして、収穫したら焼き芋にして皆で楽しく食べるという活動をやっています。ロータリーを通じて感じたことは、いろんな人に家庭菜園してもらったらいいかなぁって思っています。野菜作りは、会社勤めの参考にもなると思うよ。白菜、大根は、よく見ていないと虫にやられたり、色んな病気にかかったりするからね。外部から邪魔するものがくる。社会に出ても、自分の思うような道になかなかスムーズに行けない。競争だから基本的に邪魔が入るわね。それと一緒だ。

こだわりの農業

ここでは、米、ソバ、トマト、ハボタン、フリージア、メロン、サツマイモなどたくさんの作物を育てとります。その中でも力を入れとるのは、フリージアやね。これはね、石川県がものすごい力入れとる。石川県で作っている人がいなかったから、県が力をいれたらしい。県外から高く仕入れるより、地元で作って地元で売るってことやね。その石川県のオリジナルの名前がエアリーフローラや。石川県の品種は 15 種類ぐらいやったと思う。

フリージアは育てるのが大変で、そりゃ生き物やし、いつも見てやったりしないとね。やっぱり市場に出すためには基準があるんやってね。米は昔から作っとるからその基準は熟知しとるけど、花になるとそういう感覚は慣れてないからね。基準に合わすのに大変だね。今、工夫しとることは、生産コストを下げることです。そして、１年間を通じて仕事ができるようにと考えとる。今までやったら、この地域は水稲だけやった。それを米だけでなくて、色々変えながらやっていきたい。

今仕事しとるの全員 60 歳過ぎた者ばっかりです。会社を定年になった人だけでやっとります。若い人もおるけど、やっぱり土曜、日曜は家族を大切にするようになってきとるから若い人が出てこない。50 歳、60 歳になると子供が成長して、田んぼに出てきてくれる機会が多くなっとるけど。30 代、40 代の小学生のおる親は家庭サービスで無理やね。30 歳そこそこの者は田んぼもしたこともないし関心もない。だから、５月の連休の１日だけ手伝いしてくれやっていう感じかな。だから、強制的ではないけども５月の田植えになってくると皆に出てもらっています。

これから

いろんな体験の中で農業は楽しいよと伝えたい。30 歳、40 歳までに体験してもらいたい。１回体験すると、農業に取り組みやすいらしい。今、50 代、60 代の人たちは、子どものときから手伝いしとったもんです。学校終われば親の手伝いしとったもんです。私の孫たちには少しだけ手伝いをしてもらい、収穫を楽しんでもらっています。

課題はこれから米の価格がどう変わってくか、一番の心配はそれやな。平成 30 年から米が自由に作れるようになる。でもみんな自由に作ったら価格がどんどん下がると思う。私らは、以前の転作で、どれだけ作ればいいのかというラインを知っとる。だから、他の者はともかくとして、私らは、以前の生産ラインである６割５分ほど米を作る。３割５分は麦とソバを作る。そうすることで価格が安定していくやろうと思っとる。自分らで定めてそれを守っていこうってしました。「みんな米自由に作っていいよ」って言っても私らは、

そんな訳にはいかんやろと思うし、そうしていくべきやと思うよ。

今後は、１年間を通じて仕事をできるようにしていきたい。ここに働きに来とる人も１年間に６か月しか働けないってなると誰も寄り付かんからね。稲とソバの時期をちゃんと考えて育てていきたい。そしたら冬の間余るから、ハボタンを播いてそれを12月まで管理する。12月になったらフリージアの種を播く。それによって４月までフリージアを育てる。こうしてやっと１年を通じて仕事のローテーションを休む間もなしにできた。

最後に

私は、米は特に日本人の源やと思っとる。だからどんなことがあっても米作りを皆で守っていかなければならん。個人で守るのはできんから。私は特にこの集落を守っていこうと。米の価格が低くなったら、もう、しょうがない。この集落で、自分たちの食べる分だけでも皆で作っていく。賃金下げてでも直海・釈迦堂地区の環境を将来にわたってずっと守っていこうと皆に言っています。

［取材日：平成29年８月２日、９月10日］

PROFILE

岡野　秀彰 おかの　ひであき

昭和24年３月10日・69歳
有限会社　直海・釈迦堂営農組合　代表取締役

志賀町直海に生まれ、子どもの頃は、家の農業を手伝い育つ。日本大学を卒業後は農協へ就職する。農業者の高齢化が進み、離農者が増えてきたことから、その後農協での経験・ノウハウを生かし、平成14年に地域の農地を守るため農業生産法人を設立した。

● 取材を終えての感想 ●

聞き書きを経験して、最初は不安ばかりで、最後までやりきれるかどうか心配でした。しかし、取材をしていくごとに不安は消えていきました。取材をした岡野さんはとても気さくな方で農業のことや自分のことなどいろいろお話してくださいました。農業のことを何も知らない僕でも分かりやすく説明してくださり、とても嬉しかったです。また、研修会はとてもいい経験になりました。聞き書きを一緒にする仲間がいて、お互いに仲良くなり、意見交換して楽しかったです。いざレポートを作ろうとすると、インタビューの音声を一字一句書き起こして文書にするのはとても難しかったです。でも、２人で協力して頑張りました。農業についての知識は全然無かったけど、この取材でいろいろな農業の種類があって、いつも食べている野菜は、農家の苦労があってできていることが分かりました。

聞き書きをして大変なこともあったけど、その分たくさん学ぶことがあってとてもいい経験になりました。

今川　孝星（写真：右）

今回「聞き書き」に参加して、様々なことが分かり、とてもいい経験になりました。

私たちでインタビューしてそれを文字に起こしてレポートを作るという作業は、とても大変でした。それでもインタビューした内容を分かりやすく文章を構成するという作業は、文章をまとめて書くことが苦手な私にとって、とてもいい経験になりました。

そしてインタビューした岡野さんは、とても優しい方で、私たちが質問したことについて詳しく教えてくれました。今の農業の現状や、これからどうしていくべきか、今までの苦労なども教えてくれました。さらに一緒に外に出て、岡野さんは広大な田んぼを見せ私たちの活動に積極的に協力していただきました。今回の聞き書きを通じて、岡野さんは、農業の担い手を残していきたいとおっしゃっていました。そのことをこの記事を通じて色々な人に伝わればいいなあと思いました。

様々な人に会えて、様々な事を知れて「聞き書き」に参加できてとても良かったです。

川田　孝紀（写真：左）